

がんばることのカッコ良さ

山形県山形市立第三中学校

一年 藤 嶋 涼 太

僕は、小学校の時運動というものを大して本気でやっていたなかった。その理由はいろいろ考えられる。例えば、めんどうくさかったり、肉体的疲労を気嫌いでいたのかもしれない。だが自分の根っこの部分では、努力している人や、頑張っている人のことをカッコ悪いと馬鹿にしていたのかもしれない。しかし、そんな考えをもつ自分こそが浅ましくカッコ悪いと気づいたのは、中学の部活に入って三カ月目のことだった。

中学校に入る直前というのは、一般的には、期待や不安を抱きモヤモヤした気持ちになったりする人が多いそうだ。しかし僕はあまりそういうことを考えておらず、中学生生活というものを楽観視していた。なぜなら環境が大きく変わるといわれても、小学校の友人たち全員と学校が別々になるわけではない。変わることといえば朝向かう学校と席順が変わるだけだと思っていた。それはとても甘い考えだと今になってわかる。まず同じ学校の人たちとは別々のクラスになることは分かっていたが、いざ中学のクラスを見てみると、同じ小学校の人は十人もいなかった。さらに言ってしまうえば同じクラスだった人は一人だった。その時点で新しく自分のコミュニティ

を作らなければいけないことになる。そんなことは誰もが体験する当たり前のことだという人もいるが、僕にはとてもおっくうなことに感じられた。大きな変化はもう一つある。部活動だ。小学校の終わり頃から周りでは何部に入るかの話はあったが、自分は何部に入るか決めあぐねていた。結局確たる理由もなく、少し興味のあったバドミントン部に入ることにした。

バドミントン部に入って最初の一週間は走り込みだった。まだ人生十三年だが、こんなに走ったことはないと言いつけるくらい走った。しかし今思えば、僕はこの一週間の間に自分の考えの甘さに危機感を覚えるべきだったと思う。突然だが、僕は昔からなんでも平均より少し上でこなせる奴だった。それがいけなかったのだ。一週間の走り込みでも中間くらいで何となくこなせてしまったのである。ここで大幅に遅れてでもいけば、少しは努力の必要性を感じていたのかもしれない。そんな中、市中総体がやってきた。

当然だが、市中総体に僕は出るわけではなかったが、応援として会場に行った。もちろんだが先輩たちの試合には感動したし、自分との実力の差を肌で実感した。

しかし、心の隅でふつつつと、静かに、だが確実に湧いたいつもの甘い考えがあった。それは自分もこの先輩たちのように普通に大会に出られるだろうなという、何の根拠もない考えである。今思えばおかしき限りである。小学校から特別な努力もせず、むしろ努力している人間をカッコ悪いと思っていたのだから。そんな僕なのだから、中学校に入り部活に所属したら突然努力をするはずもなく、みんなと同じ部活のメニューをこなして家に帰って寝る生活をしていった。

そんな生活がしばらく続き、一年生が出られる大会がせまってきた。しかしその大会には一年生部員九人中五人しか出られない。それは少し前から分かってはいたが、私は特別家で練習はしていなかった。もちろん出場する選手は部内戦をして決めることになった。

試合結果だが、いうまでもなく僕は六位で大会には出られなかった。この時点で普通なら悔しいとか、なぜ負けたとか考えるのであろう。僕は違った。負けたことへの言い訳を考えていたのである。家に帰れば家族に大会に出られるのかどうか聞かれると思いい、そのことに備えていたのだ。今思えば打算的嫌になる。

家に帰り、帰り道で作った言い訳を家族に披露した。しかしすぐに言い訳だと言われてしまった。それでも自分は言い訳に言い訳を重ねてしまい、しいには対戦相手のことをおとしめるようなことまで言ってしまった。そこへ家族からとうとう避け続けてきた現実を言われてしまった。

「自分の努力不足を他人のせいにするな。」
人は自分の痛いところを突かれると怒る生き物で、自分も例外ではなかった。ひとしきり怒った後に、兄に言われた。

「悔しかったら、悔しいって言えばいいんじゃない。」
僕は泣いてしまった。本当は悔しかったのである。全部自分の努力不足のせいだとわかっていたのだ。
僕は「がんばるカッコ良さ」に気づけた。だから、がんばれるカッコいい自分になれるように、悔しさを素直に認められる自分になっていきたい。